

研究題目	日本所蔵の七絃琴楽譜の善本《歩虚僊譜》に関する基礎的研究	報告書作成者	鳥谷部輝彦
研究従事者	鳥谷部輝彦（研究代表者）、何子瑠（研究協力者）		
研究目的	<p>本研究では、《歩虚僊譜（ほきょせんぷ）》という七絃琴の楽譜の歴史的な位置付けを明らかにした。</p> <p>日本は長い歴史の中で中国と交流し、その文化を吸収してきた。中国で製作された手書きや印刷の古典籍の中には、現代の中国では逸失したが、日本に現存する書物がある。それらは日本国内に限らず国際的にも貴重である。音楽分野では《碣石調幽蘭》という琴譜や《楽書要録》（第5・6・7巻のみ現存）という音楽理論書などは唐代に書かれたが、日本のみに伝存する。</p> <p>本研究で扱う《歩虚僊譜》（1556）は、明代の嘉靖年間（1522-1566）に印刷・出版された。中国には第5巻と第6巻のみの残欠本が現存するが、日本には序文・跋文や全9巻の本文等を完備する完本が現存する。この琴譜に関する先行研究は中国の残欠本に言及するのみであり、日本の完本を調査していない。そのため、日本蔵本の研究により、七絃琴の歴史に関する新たな知見を得ることが可能である。</p> <p>七絃琴の歴史では中国において紀元前の出土品があり、《春秋左氏伝》には紀元前6世紀初頭の伝承者を記す。孔子が好んで弾いた楽器であるという伝説も残る。この楽器及び文化は、儒教・仏教・道教という思想のみならず中国の様々な古典文化を基礎にしている。日本には奈良平安時代に南都寺院などに伝来したが廃れ、江戸時代に再度伝来した。本研究で扱う日本蔵本は、江戸時代に日本が中国の文物を盛んに学んだ時期のものである。即ち、豊後佐伯藩の毛利高標（もうり・たかすえ、1755-1801）によって中国から購入され、歿後の文政10年12月（1827年12月または1828年1月）に江戸幕府に献上された書物の一つである。</p> <p>中国では戦争や政治などによって多くの古典籍が失われてきた歴史がある。七絃琴の資料もあまり多くは残っておらず、伝承曲を列挙する曲目録などの専門書はたかだか宋代に遡る。特に七絃琴の曲を集めた琴譜であれば、現存最初期に相当するものは明代の《驪仙神奇秘譜》（1425）である。その後数点の琴譜が残るが、嘉靖年間には浙派という流派によって多くの琴譜が林立して作られた。即ち、《梧岡琴譜》（1546）と《杏莊太音補遺・續譜》（1561）、《琴譜正傳》（1561）は浙派の中でも徐門の伝承譜であり、《清湖琴譜》（1564）はこれらを受け継いだ。《太音傳習》（1562）も別の徐門の伝承譜である。《風宣玄品》（1539）と《西麓堂琴統》（1549）は徐門ではないが、浙派の琴譜である。嘉靖年間は浙派の琴譜製作がこのような盛んな時代であり、それは世の中に大きな需要があったからである。本研究では《歩虚僊譜》の歴史的な位置付けを定めるために、これらの同時代の琴譜と照合するという方法を採用した。</p>		

研究内容

一、研究対象の資料

(1) 中国蔵本：中国藝術研究院音楽研究所蔵（中国藝術研究院音楽研究所・北京古琴研究会編《琴曲集成》北京：中華書局、2010年版の第3冊の影印による）。

(2) 日本蔵本：国立公文書館内閣文庫蔵（子 065-0005）。

二つの蔵本に共通する部分（第5・6巻）の印刷の欠損箇所を比較することにより、両蔵本は同一の版木から印刷されており、異同はないと考えた。明代の琴譜には、《臞仙神奇秘譜》や楊掄撰《太古遺音》（1589年原書）のように、同時代または後世の人が改版したものもあるが、《歩虚僊譜》はそうではない。

二、先行研究

撰者顧挹江（コ・ユウコウ）の経歴に関しては次の先行研究がある。文中で引用される関連史料とともに参考にした。嚴曉星「《歩虚仙琴譜》輯刻者顧挹江考」、南京藝術學院《南京藝術學院學報（音楽與表演版）》、2014年第1期、pp. 106-109、中国語簡体字

三、古典籍の調査

日本国内で古典籍（和書、漢籍）を調査した。調査した機関は国立公文書館内閣文庫、静嘉堂文庫、東京大学総合図書館南葵文庫、東京大学東洋文化研究所、彦根城博物館である。

四、史跡の視察

太鶴山（中国浙江省麗水市青田縣）を視察した。研究計画では白鹿洞書院を訪れる予定だった。しかし、訪問の準備を始めた10月下旬には当地の気候は気温10度以下であり、その上、宿泊施設には暖房設備が備わらないだろうということが判明した。そのため訪問地を変更し、研究資料に書かれているもう一つの史跡である太鶴山を訪れた。

研究内容	<p>五、中国の方志（地方史）資料の調査</p> <p>中国の地方史資料を影印で出版している図書によって、関連地域における七絃琴伝承者について調べた。その地域は、撰者顧搢江の生地（松江：現上海市の一部）と住地（処州：現麗水市）、及び白鹿洞書院（九江）である。これらの地域のうち、松江には松江派という七絃琴の流派が活躍していた。また、白鹿洞書院は儒教学校であり、その所在地である九江には「江西譜」という楽譜伝承があった。これらの伝承と思想が顧に与えた影響を調べており、現在も継続している。</p> <p>六、古楽譜の解釈と演奏</p> <p>《歩虚僊譜》に所収されて特有な7曲のうち「乃欵吟」の楽譜解釈と演奏を、何子珺（研究協力者）により実施し、録音した。その音源を学会発表にて使用した。</p> <p>七、学会発表</p> <p>題目「七絃琴譜《歩虚僊譜》の成立時における歴史的な位置付け」、東洋音楽学会東日本支部第112回定例研究会、令和元年（2019）十二月七日、於東京藝術大学（図1）。</p> <p>八、論文</p> <p>中国の学術雑誌に論文を投稿し、令和2年12月時点で査読中である。</p>
------	--

研究のポイント	<p>本研究の特徴は二点ある。</p> <p>(1) 日本に所蔵される《歩虚僊譜》の完本は全世界で今まで誰にも調査されておらず、本研究が最初である。</p> <p>(2) 研究方法では、第一に資料研究の観点によって、《歩虚僊譜》に所収される全 53 曲に対して、明代嘉靖年間以前の 13 点の琴譜の所収曲を照合した。第二に音楽実践の観点によって、古楽譜を解釈し、演奏した。</p>
研究結果	<p>本研究で判明した事柄は、次の通りである（図 2）。</p> <p>(1) 当琴譜は、短小曲と中大曲を組合せるという唐代の陳康士（874-888）が提唱した考えを引き継ぐ。この考えは、《臞仙神奇秘譜》や《西麓堂琴統》、《杏莊太音補遺》にも見られる。</p> <p>(2) 全 53 曲中の 17 曲では、同時代の《梧岡琴譜》や《杏莊太音補遺》等の徐門の伝承に近い。その一方で、別の 4 曲では「古本」や「古意」の伝承を継承しているため《梧岡琴譜》以前の古い伝承を示し、且つ《臞仙神奇秘譜》及び《西麓堂琴統》との関連を示唆する。</p> <p>(3) 半数以上の曲は現存する他の琴譜と内容が異なるため、同時代の別の伝承に基づくと考える。</p> <p>(4) 所収曲の中で歴史的特徴を持つ特有な曲は、次の 7 曲である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「清都引」「清商意」：既知の同名の曲とは内容が異なり、《歩虚僊譜》だけに載る新出曲。後世には継承されずに廃絶した。 ・「寄情操」「静極吟」：既知の同名の曲の後継であるが、その後は廃絶した。 ・「読書吟」「双鶴聴泉吟」：既知の同名の曲の前身であるため、史料上の初出が早まった。 ・「乃欵吟」：資料上で新出の曲。当琴譜のみに確認できるが、17 世紀中葉以後に「欵乃歌」の一部となって再出現する。 <p>(5) 江戸時代の日本には七絃琴の伝承があったが、当琴譜がそれに与えた影響は確認できなかった。</p>
今後の課題	<p>本研究で調査または分析することができなかった課題は五点ある。</p> <p>(1) 序文と跋文の記述内容に基づいて、松江派と江西譜の伝承が撰者に与えた影響について調査すること。</p> <p>(2) 現代の指法（指遣い）とやや異なる嘉靖年間の指法について調べること。</p> <p>(3) 中国思想に関しては、儒教学校である白鹿洞書院の琴人が撰者と交流した内容と、道教の語である「歩虚」が書名に冠せられている理由について調査すること。「歩虚」とは、道教祭儀で念経しながら神座の周囲を歩いたり神座に對面したりする行為、或いは道教祭儀の始めに奏楽歌唱する第一曲の名を指す。</p> <p>(4) 日本蔵本に重ねて捺されている二つの蔵書印の主を特定すること。</p>



図1 学会発表で投影したスクリーン
(令和元年12月7日)

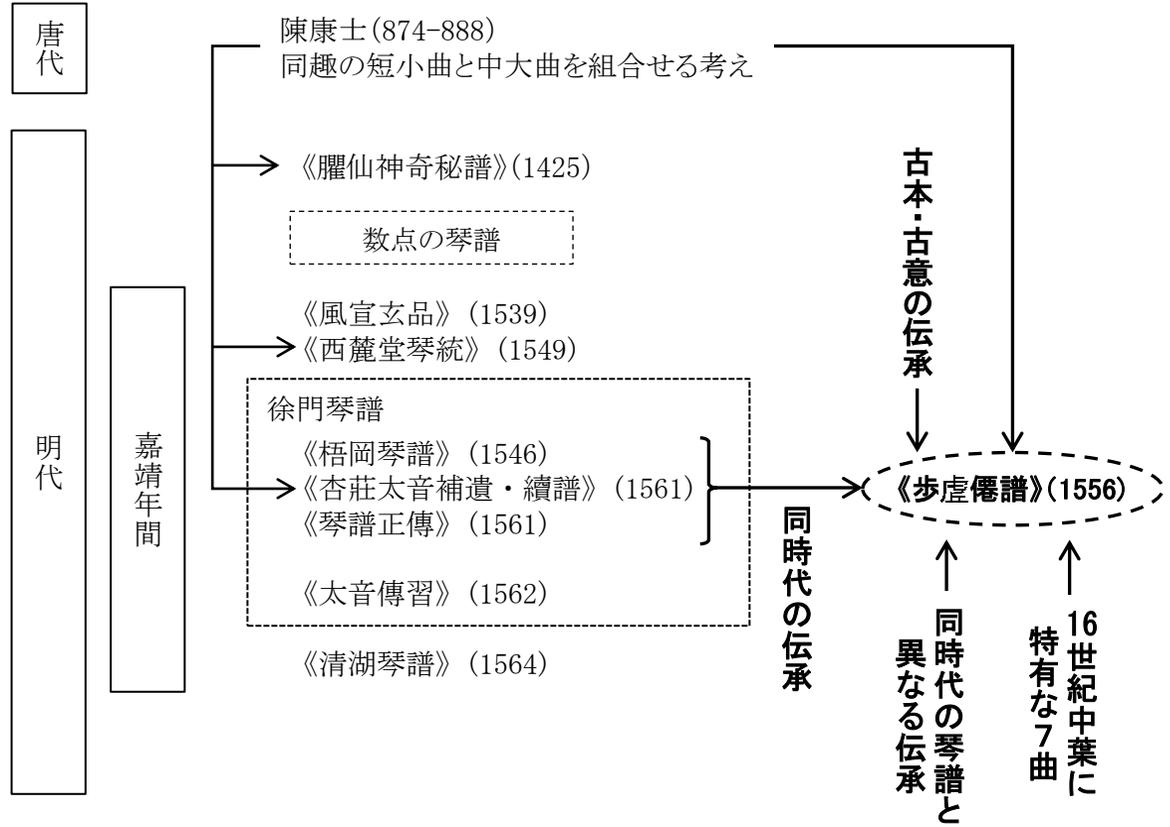


図2 《歩虚僊譜》の歴史的 position 付け